

J-クレジット制度等の「水稻栽培における中干し期間の延長」に取り組む際の留意点

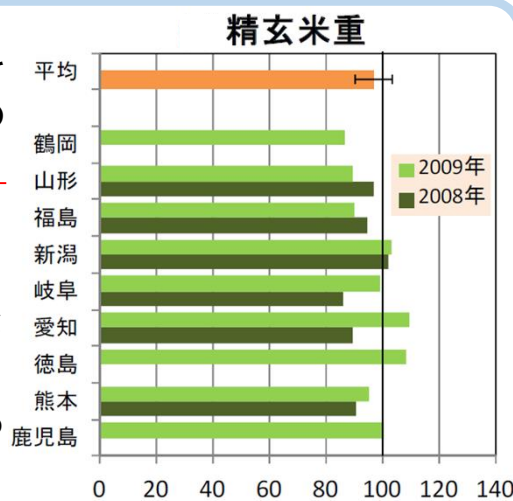
- J-クレジット制度※¹等の「水稻栽培における中干し期間の延長」※²の取組は、水田からのメタンガス発生量を減らしつつ、新たに収益を得ることが期待できるため、県内でも徐々に広がりを見せています。
- 一方、ほ場条件によっては、米の収量や品質に影響するおそれがあるため、取組に当たっては、以下の点に留意しましょう。

※¹ 温室効果ガスの排出削減量等を「クレジット」として国が認証し、取引を可能とする制度。事業者がまとめて申請する形が一般的。

※² 中干し期間を、その水田の直近2か年以上の実施日数より7日間以上延長する(前倒し延長も可)。所定の審査を経てクレジットの認証が受けられる。

①収量・品質への影響

- 全国8県で実施された試験結果※³によれば、中干し期間を慣行の日数から1週間程度延長することで、平均3%程度の減収が見られ(図1)、**中干しの過度な延長には収量減が伴う**との注意喚起がされています。
- 一方、多くの地点において慣行よりも登熟歩合が向上し、タンパク質含量の低下が認められるなど、品質が向上したことも示されています。
- 県では現在、収量性を維持しつつメタンガスの発生を低減する水管理技術について、検討を行っています。



※³ 「水田メタン発生抑制のための新たな水管理技術マニュアル」(H24.8 (独)農業環境技術研究所)

中干し延長による精玄米重変化(慣行水管理を100とする)
図1 全国8県の水田メタン削減試験における中干し延長による収量の変化

②玄米中のカドミウム(Cd)濃度への影響

- 過度の中干しは、土壌からのカドミウムの吸収を促進させ、玄米中のカドミウム濃度を上昇させるリスクがあります。なお、コメ(玄米及び精米)中のカドミウム濃度が0.4 mg/kgを超えると、食品としての販売ができなくなります(食品衛生法)。
- 中干し期間は、県が推奨する標準的なカドミウム吸収抑制対策(**出穂3週間前から出穂2週間後までの間、水田を湛水状態に保つ**)や地域の状況などに基づき、適切に設定してください。

表 湛水管理によるCd吸収抑制効果

水管理方法 (出穂-21～ +21日)	玄米中Cd 濃度 (mg/kg)										
間断かん水	0.66	湛水管理(出穂期3週間前～2週間後)									
湛水管理	0.18	- 3 週 - 2 週 - 1 週 + 1 週 + 2 週									
		5月		6月			7月			8月	
		形 幼 成 穂 期									
		出穂期									
		収穫									

「コメ中のカドミウム低減のための実施指針」(H30.1 農林水産省消費・安全局)より引用・改変

図2 カドミウムの吸収を抑制する水管理

注) 暦は4/20植えコシヒカリの例